

エルサレムのミツイ・ヒルから、ユトランド半島の石まで

「テラ・サンクタ・ミュージアム」

設計=GTRF/ジョヴァンニ・トルテッリ&ロベルト・フラッソーニ

ヘロデ王の城砦があったところ

マヌエラ・カスタニヤーラ・コデルッピ

参照 | 本誌pp.4-15

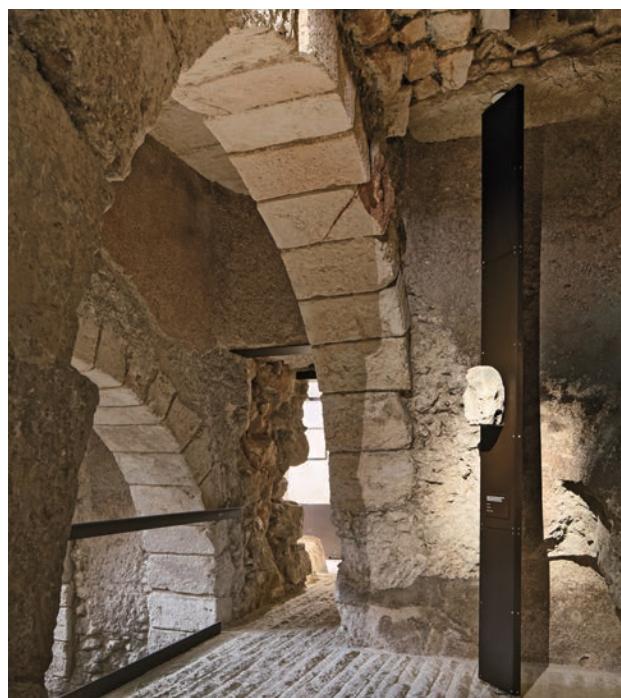
エルサレムは疎外感を覚えさせる場所だ。この都市の驚くべき歴史的堆積、大勢の信徒が神聖視する象徴の貴重さと複雑さによって、われわれは「存在しない場所」に投げ出され、非現実的に感じさせられる。まるで、古代ギリシア語の不定過去の時間に放り込まれたような印象を抱く。この時制では、自分の行為は生起した瞬間に認識されるが、行為に先立つ時間とその後に続く時間とも結びつけられる。

この非現実性の特殊な形態を、筆者はかつて1970年代半ばのヴェネツィアで経験している。その頃、勇気ある教員たちの指導で、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインやカール・クラウスの格言あるいはヴァルター・ベンヤミンの著作に親しみ、彼らの批判的で「過激な」思想のフィルターを通して、現代建築家の責務と役割とは何か(あるいはそれがあるのか)を理解すべく学んでいた。エルサレム

に滞在すると、「文化のニューリッチたちの精神」を支配した「過去との悲劇的な関係」を批判した、アドルフ・ロースの辛辣な一節が脳裏に蘇る。あるいは、ル・コルビュジエが1931年に「装飾と犯罪」について書いたことも思い出される。「ロースはわれわれの足元を箒で掃き清め、思想的に抒情詩としても正確なホメロス風の壮大な浄化を行った」(Jean-Louis Cohen, *Le Corbusier. Tout L'oeuvre construit*, Flammarion, Paris 2018)。

この地では、かの「壮大な浄化」の影響が現在進行形かつ具体的に感じられ、優れた建築家の誰もが自分の作品に託すことのできる伝達力に即したものに思える。ロースが引き合いに出す「墓と記念碑」は、彼にすれば「建築」だった。なぜなら20世紀初頭においても現在においても、良い建築は説得力があり共感させる方法で居心地よく感じさせ、そのメディアと文化としての機能によって語られる物語を通して、われわれを「どこかへ」連れていくてくれるからだ。

エルサレムの金色に輝く石灰岩は偽ることなく、その歴史を語りかける。われわれはさまざまな場を通り抜けながら、それらがどのように都市の部分を作ってきたか、空間の疎と密の関係、現存する建物のボリュームと失われた建物の——目に見えるものも見えないものも



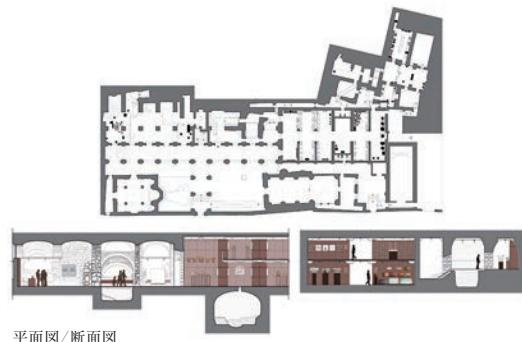
通路端部



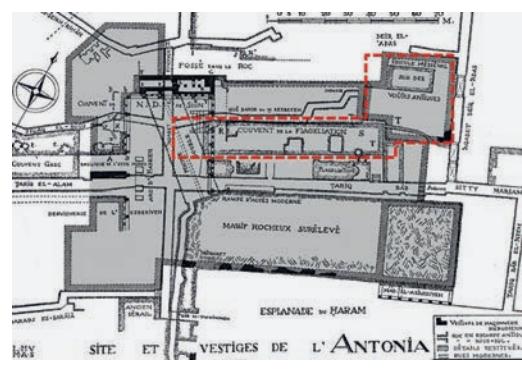
古代ローマ・ビザンチン時代の貯水槽:通路より見る



中庭



平面図/断面図



アントニア砦の想像図

——残滓との、貴重で技巧的な相乗効果をどう形成してきたかを理解するのだ。

-

一部のエルサレム地図では、テラ・サンクタ・ミュージアム(SBF考古学コレクション)が占めるエリアが「ヘロデの家」と呼ばれている。これは中世から誤ってヘロデ「大王」の宮殿があったとされた地名だ。ところが(フランシスコ会の学者も認める学説によると)、今日イスラム居住区の中にあるこの場所には、ヘロデが神殿の防御と支配のために建てた「アントニア砦」が建っていた。砦はユダヤ戦争の過程で、70年にティトス帝の軍隊によって完全に破壊され、ハドリアヌス帝によって公共広場に変えられた。ここが聖地管理を任せられたフランシスコ会士が19世紀に本拠地とした場であり、以後、砦(かつてピラの総督府とされ、またビザンティン=クロアチア教会が置かれた)の残骸が「鞭打ち修道院」の内部で保存されている。修道院に隣接する「Studium Biblicum Franciscanum(SBF:フランシスコ会聖書研究所)」は、ローマのアントニアヌム教皇大学に属す学術機関として1901年に設立され、1924年からエルサレムで活動している。2001年に同大学の「聖書研究・考古学学部」になった。

1902年にフランシスコ会士たちが最初のエルサレム博物館(中東地域で最初の博物館のひとつ)を設立し、彼らが研究調査した聖書関連地に由来する素晴らしい出土物が展示された。

「シテ・デゼレクトリシャン」

設計=AAPP/フィリップ・プロスト

労働の記憶に捧げた記念碑 エリザ・ボエリ

参照 | 本誌pp.24-35

残っているものは、いつも同じように太く長い息を吐いているポンプの排気だけだった。それは、今は彼の目に灰色の湯気の見分けられるなにものも飽かせることのできない食入鬼の息であった。(……)なぜかわからなかったが、彼は苦しむため、闘うために炭鉱のなかへ再び降って行くことを望んでいた。彼はボンヌモールの話した人々のこと、一万人の飢えた人間が何も知らずにおのれらの肉を供養しているあの食い飽きてうずくまっている神のことを烈しく考えていたのである。

エミール・ゾラ『ジエルミナール』、1885年

〔邦訳書:安土正夫訳、岩波文庫、1994〕

ランスから30km、リールから60km離れたブリュエ=ラ=ビュイシエールに、「シテ・デゼレクトリシャン」の小さな町がある。この地域は、近年ノール=パ=ド=カレー県の記憶を刷新する動きが高まりを見せているが、19世紀から20世紀にかけてフランスの産業発展の最も重要な舞台のひとつだった。

『CASABELLA』では、これまでこの地域とその建築的・経済的再生を巡る物語を綴ってきた。この語りはフランス地方をかすめて、「港の叙事詩」の舞台・ダンケルクの海岸に上陸すると、ラカトン&ヴァサル(847号、2015)、SANAA(823号、2013)、ピエール=ルイ・ファロシ(847号/855号、2015)といった現代建築家の作品に触れるながら進む。もちろん、エド温ン・ラッセンス卿が設計したフランスの軍人墓地(675号、2000)の静謐な広がりや、大地から立ち上がったばかりの、フィリップ・プロストによるノートル・ダム・ド・ロレート国際メモリアル(844号、2014)が表現する感動的な抱擁も忘れずに語られる。

「シテ・デゼレクトリシャン」は当初「シテn.2」と呼ばれていた。1856年から1861年にかけてブリュエ採掘会社が掘った炭鉱の「縦坑n.2」に近かったからだ。この小さな集落は、ベトゥースとブリュエ=ラ=ビュイシエールの間に横たわる鉱脈地帯で働く炭鉱労働者と家族のために建設された。2012年に、19世紀の炭鉱都市としての原

型的機能を理由に「発展と生活の文化的景観」としてユネスコ文化遺産に初めて登録された5つのパイロット・サイトのひとつとなった(他はル=アン=ゴエル、オワニー、ワレー、ル=ヴァルド)。

翌2013年に「ベトゥース=ブリュエ都市圏共同体」によってこの地域の近未来図を構想する設計競技が開かれ、パリを拠点とするアトリエ・ダルシテクチュール・フィリップ・プロスト(AAPP)が勝利した。

シテにはベトゥースの鉄道駅から短い道程で行けるが、そこは地域の住民たちがしばしば忘れようと努めた過去の生き証人である。過去の忘却のために、都市化が拡散し、19世紀後半に初期の労働者集落が土地に刻み付けた厳密な幾何学的構成は、ほぼ消された。ベトゥースを後にして直線的なレピュブリック通りに入ると、新しい産業地区に縁どられた計画都市が来訪者を迎える。しかし数百メートルで工場群は終わり、白い窓がついた赤レンガの箱のような住宅が幹線道路に沿って何百軒と並ぶ。まるでこの場所の歴史を語る産業の中核、シテ・デゼレクトリシャンへと向かう長い行列のようだ。

シテの北側は小さな森と黒ずんだ大地の広がる風景と境を接し、明確な境界線で区切られている。長さ120km、幅12kmの黒土に覆われた舌状の土地で、1884年のアンサン炭鉱労働者の大規模蜂起で頂点に達した、最初の産業革命の最中にストライキ中の労働者たちがこの上を行進した。

アンサン蜂起の翌年、エミール・ゾラは当時の不安、怒り、苦労を言葉で描き出し、『ジエルミナール』のページに閉じ込めた。同書を読むと剥き出しの大地を背景に、石炭採掘の縦坑や、炭鉱町で待つ人々が「インクのように暗



ノール=パ=ド=カレー県の鉱山地区

く濃い」夜によって結び合わされた人間的な出来事が展開する。

1914年10月から1918年までの第一次世界大戦中は、地域の石炭鉱床の4分の3がフランス軍と連合軍によって支配された。そのため、103ヶ所の採掘坑と関連する集落がドイツ軍の攻撃によって破壊され、ブリュエ採掘会社に払い下げられた土地に爆弾が降り注いだ。

ところが石炭の採掘は中断されず、戦後の復興によって、工場の建物にも、独立した棟ごとに新たに建てられた田園都市にも、使用する材料の選択に大きな刷新がもたらされた。

鉄筋コンクリートの使用、動力源の蒸気機関から電気への移行、それに伴い発電所が周囲の風景を根本的に変え始め、並行して1920年から1930年の間に採掘作業を機械化し速度を上げるために、エアコンプレッサー式ハンマーが採用された。これらが主要因となって、地域一帯が急激な人口増加の時代に入った。

特にポーランド、イタリア、ベルギーから集まった鉱山労



パロー:既存の住宅棟



カラ:住宅棟に付属する屋外空間

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2019 Arnoldo Mondadori Editore

©2019 Architects Studio Japan

「スロットフェルトラーデの修復」

設計=ブラクシス・アルキテクター+ステファン・ゾンダーガード

「伝統はオリジナルの不純な移入に存する」

ウィリアム・マン

参照 | 本誌pp.36-45

ここユトランド半島南部では、気づかぬうちにデンマークからドイツに変わり、横たわる大地が海の水平線と溶け合う。まるでエミール・ノルデの水彩画のように、空は赤みがかった光に照らされる。刻々と変わる色彩と動く輪郭のはかなさや、泥土やイグサの非永続性と比べて、ムーイルテンダーの主要道路の執拗なほど鉱物的な性質には驚かされる。角を削られた自然岩が道路を覆う光景によって、われわれは何千年とは言わないまでも何世紀も前の、大陸が浸食され社会が形づくられた時代に連れ戻される。氷のドームが後退はじめ、北欧の高山に多い花崗岩が、赤、茶、紫、青の色の戯れと混ざり合う。何千もの小石が集められて、中世の小都市の主軸を、聖堂と司教館（現在は王宮の一部）の間に描き出す。

集落の縁の小さな丘の上に、少し丸みを帯びた屋根の大きな干草小屋がある。反転した船のように、孤立し

ているが風景の中で堂々と聳えている。まるで海の水を切って大海を渡り、大地を耕したヴァイキングが建てたようだ。干草小屋は見慣れた外観で、フリースランドやシュレスヴィヒの大きな小作農家や干草小屋を思わせる。この場と調和し、その一部になっている。農地を抜けて近づいていくと1本の細い砂利道が現れ、その正面中央から分岐して、粗い石による四角い筏基礎を形づくる。そこから、赤紫色の煉瓦でできた基壇が立ち上がる。煉瓦壁の基部には大きな石のブロックが据えられ、柔らかくも尖った藁ぶき屋根が上部に載っている。

広く暗いヴォリュームの中に入ると、低い壁に穿たれた窓から自然光が射しこみ、棟木の列に沿ってランプで照らされる。湾曲した梁材が長さ30mにわたってリズムを刻み、天井には藁屋根を支える水平の木舞と、イグサでできた金色の細い紐が見える。床面は滑らかで艶があり、赤、茶、金、グレーの斑点が散らばっている。黒いGFRP（ガラス繊維強化プラスチック）製の3つの箱——小部屋もしくは巨大な調度——は、地域の文化遺産や環境に関するドキュメンタリー上映に使われる。映像には、近隣から発見された後に逸失した5世紀の金色の角2本のホログラムも含まれる。これが干草小屋の新たな機能だ。すなわち、観光客に情報を提供し、さまざまなイベント

会場となる。

修復とコンバージョンによって、干草小屋は見捨てられた状態から威信ある場に高められた。現代的な波板屋根を支える梁が実質的に腐っていたことが判明した時点で、古い建物を修繕する抜本的な工事の必要性が明らかになった。公衆に開かれた施設にコンバージョンする計画は、レアルダニア財団が一部出資する、より広範なシャッケンボー王城再生事業に組み込まれた。建築家ステファン・ゾンダーガードがディレクションを務めた修復計画は、外科的な視点と施工の質の高さにおいて模範的だった。干草小屋の修復は新たなコンクリート基礎工事から始まり、その上に梁を受ける石材が置かれた。煉瓦壁も取り壊され、再建された。さらに、湾曲した梁材の痛みの激しかった両端に新たな木材が継ぎ合わされた。

風景と屋内からはつきりと読み取れるのは、修復と変形という対照的な2つの意志である。半円形の盛土、干草小屋の中央部に向かう細道、そして特に、修復された小屋の横にあった組積造の穀物庫の取壊しといった工事の結果、素朴な干草小屋は独立した気高い存在となり、経験は聖なるものに変えられた。修復工事によって、魅惑的だが、おそらく目を欺く永遠の感覚が小屋一帯に与えられた。建物本来の農業の用途から離れて、形態的



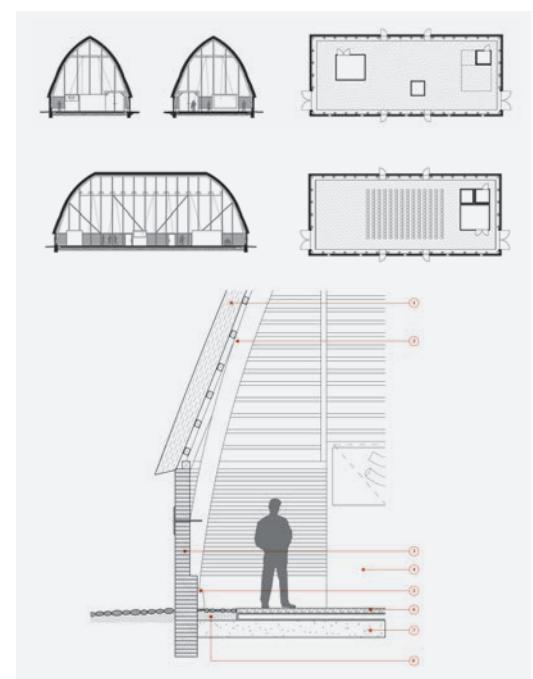
大屋根と外壁による構成を見る



遠景



正面アプローチより見る



平面図／断面図／ディテール

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2019 Arnaldo Mondadori Editore
©2019 Architects Studio Japan

「ケンブリッジ大学ジーザス・カレッジ」

設計＝ナイアル・マクラフリン・アーキテクツ

中庭に囲まれたファサードのリズム

フランチスカ・セツラザネットティ

参照 | 本誌pp.56-67

ジーザスはケンブリッジ大学の数あるカレッジのひとつだ。ジーザス・レーンの北側の敷地に位置し、ケンブリッジに普及したタイプロジーであるオープンな中庭式を特徴とする複合建築である。ベネディクト会修道院の跡地に建つジーザス・カレッジは、時代とともに学生数の増加に応え

て、複数段階を踏んで拡張された。12世紀から21世紀までのさまざまな建物を包含するまでになった。2014年にウェズリー・ハウスの大半が購入されたことを機に重要な刷新が始まり、現在ウェスト・コートと呼ばれる建物が作られた。新しい建物は、車道とじかに接しており、ジーザス・カレッジに真に都市的なファサードを与えることになった。ジーザスのメイン・エントランスは奥まった位置に置かれ、石畳の細長い通路で車道と連絡する。

ナイアル・マクラフリン・アーキテクツが構想したウェスト・コートの設計案では、既存の建物群を修復し、異なる建築様式が共存できると同時にそこに現代的ヴォキヤブリードを統合できるよう、全面改修した建物に組み入れられる。

このプロジェクトではまず、妨げになっていたウェップビルディング（事務室、社交スペース、宿舎に充てられた）の修復と、カフェテリアの新築が実施された。カフェテリアは軽やかなパヴィリオンで、既存建築の堅固さとコントラストをなす。1階の空間を公園のほうに拡張し、ファサードがノース・コートのほうに突き出し、人々の出会い場と、この中庭と他の中庭とを結ぶ場に変わった。最も重要で目立つ改築工事は、南側の、車道に面したファサードの部分である。これはランク・ビルディング（1970年代に建てられ老朽化した建物）の改築で、加えて西端にウェスト・コートへのエントランス・ボリュームが新築された。連結要素となるエントランスは、木造骨組によるガラス・ランタンのようなフォルムを備



街路側ファサード：ランク・ビル



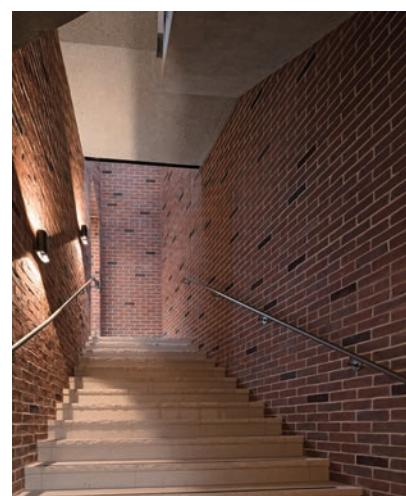
中庭側ファサード：ランク・ビル



メイン・エントランス



エントランス上部



エントランスから続く階段室



バルコニー

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2019 Arnoldo Mondadori Editore

©2019 Architects Studio Japan

「オックスフォード大学ビーコロフト・ビルディング」

設計=ホーキンス\ブラウン・アーキテクツ

研究のための氷山 フランチスカ・セッラザネットティ

参照 | 本誌pp.76-83

市心北東部に位置するオックスフォード大学サイエンス・エリアには、多くの科学系学部の建物がコンパクトにまとまっている。近年、同大学は一連のリニューアル計画に着手しており、そこでホーキンス\ブラウン建築設計事務所が主役を務めた。生化学学部は2008年に完成した最初のプロジェクトで(第2期計画は2020年の完成予定)、大学建築の基本概念を逆転させた。つまりこれからは、集中と研究のために独立した個別の建物ではなく、外部と接する研究室に囲まれた広い公共空間とする。

物理学部の新館、ビーコロフト・ビルディングでは、この同じコンセプトを進化させている。設計案は、人々が出会いアイデアを分かち合うための集合的で透過性のある空間を、個別の静かな研究室と結合するというアイデアから出発した。既存の物理学部校舎と共通のエントランスで結ばれたビーコロフト・ビルディングは、実験物理と理論研究の双方を包含できる。この2つのエリアは明確に分けられた。実験室は地下に置かれた一方、事務室や研究室は上層階に置かれた。この選択は、狭い敷地と、構

内中央に聳える高さ18mのカルファックス・タワーから半径1.2km内にある新築建物に課された、「カルファックス・ハイ」の高さ制限によって余儀なくされたとも言える。そこで、オックスフォード大学で最も深い地下空間(16m)に実験室がおかれた。実験・研究のための技術機器に必要な、静力学および音響の観点から厳密に管理された環境という特殊な要件を達成するため細心の注意が払われた(振動から隔離するため、空気圧式バネの上にコンクリート構造を吊る措置など)。

さまざまな歴史的建造物——パークス・ロードに面するケーブル・カレッジの礼拝堂が真正面にあり、すぐ北側には大学公園が広がる——の近くに位置するため、ビーコロフト・ビルディングは果斷かつ優美にその立地環境の中に入り込む。そこで場の歴史と対話する力のある現代的ヴォキャブラーーが使われた。ファサードの設計案にはオックスフォード建築の影響が見て取れる——色彩、ケーブル・カレッジのような歴史建築群の垂直に聳え立つフォルム、そして1960年代にアルネ・ヤコブセンが設計したセント・キャサリンズ・カレッジのような重要な近代建築のモジュールを用いたリズムまで。

外壁はブロンズ、ガラス、銅製のエキスピンド・メタルの組み合わせで仕上げられ、ブロンズのフインの織りなすグリッドでさらに垂直性が強調される。大きなガラス壁によつて、未来を見つめる屋内の研究者と歴史的意味に浸さ



全体模型

れた現地のコンテクストとの視覚的かつ象徴的なつながりが生まれる。

道路から建物を見ながら期待されるもの以上に、地表線の下に隠された空間を重視する、ほとんど氷山のような構成が、この設計案の鍵を握る要素だ。理論物理研究に充てられる部屋は、共同作業に向いた開放的なアトリウムの周りに連なっている。現代のコ・ワーキングの方法や場からヒントを得た空間だ。ガラス屋根からの光で建物の共有のコア部分が明るく照らされる。この5層吹き抜けのヴォイドは1本の階段で連結されており、社会的相互作用を促す。アトリウム内に吊られたプラットフォームは、昼の光と空の景色をできるかぎり取り入れられるようさらして並べられ、背の高い黒板の周りには座席が置か



全景



外壁のディテール

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2019 Arnoldo Mondadori Editore

©2019 Architects Studio Japan